

“き”がわりを“き”がえる

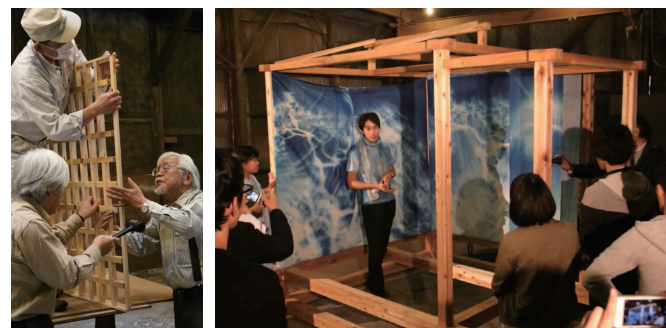
2015年10月10日(土)・11日(日)・12日(月・祝) インスタレーション KAWAGUCHI ART FACTORY
10月18日(日) アート井戸端かいぎ 川口市芝公民館

「“き”がわりを“き”がえる」は、建築をテーマに据えた催しです。
パーティーではドレスアップし、眠るときにはパジャマに着替える、寒ければ衣服を重ね、暑ければ上着を脱ぐ、そんなふうに着替えて日々をすごすように、住まいもその時どきにもっともふさわしく「き」がわってゆく」ことができたならば、ぼくたちはいつも居心地のよいところに身をおくことができるにちがいない。それが建築をテーマにした時の「き」がわりを“き”がえる」という理屈です。
イギリス人は歩きながら考える。フランス人は考えた後で走りだす。そして、スペイン人は、走ってしまった後で考える。『ものの見方について』の書き出しです。建築は理を重んじる技術だから、著者の笠信太郎

が推奨するイギリス人流にアプローチするべきかもしれませんが、今回の催しではあえて陽気な民族に倣い、走ってから考えることにしました。建築には「表現する」という別の側面もあるからです。
そこで、三日間のインスタレーションで走り始めました。いっしょに走ってくださったのは、芝浦工業大学の南研究室の面々、SeeSewの浅見俊哉さんと田村香織さん、宮大工の藤野利雄さん、朗読者を演じる奈佐健臣さんと北川原梓さんと演奏者のみなさん、「衣と体のせめぎあい」の衣装制作者とお披露目パフォーマンスのダンサーのみなさん、そして忘れてはならないのがKAWAGUCHI ART FACTORYを会場に提供してくださった金子良治さん、こうした方がたでした。

10月10日、芝浦工大の学生たちが、茶室「待庵」から本歌取りした軸組を組み立てます。この躯体は前年度の修士論文の成果です。同時に背景となる千鳥格子の屏風を藤野さんと学生たちが組み立ててゆくのですが、ときおり流れる河崎純さんのコントラバスの音色がなければ、むしろワークショップというおもむきでした。

組み上がった骨組みに衣服を着せるように布地をまとわせて居心地がつくられてゆきます。待庵の内装は「時間のきものプロジェクト」からのスピノフで、時間をうつすかわりに、遠く離れた場所で感光した布地をSeeSewが着付けます。かたわらを人が通ると壁が揺れるやわらかなしつらえは、布地ならではの表情です。千鳥格子の屏風はそれぞれのものでインテリアですが、埼玉県蕨市で双子織を復活させようとがんばっている徳丸平太郎さんが分けてくださった反物を着せて、和のおもむきを装い、舞台が整うと北川原さんの即興詩を奈佐さんが朗読し、そこに河崎さんのコントラバスが交わるジャムセッションで初日の幕引きとなりました。



奈佐健臣さん(左)と河崎純さん

10月11日は「朗読者」の公演日。芥川龍之介作『羅生門』と『蜘蛛の糸』を奈佐さんが朗読し、篠田浩美さんがマリンバ・パーカッションを合わせます。主題が「きがえる」ことなので、午前中の舞台設営からリハーサルの舞台裏までをも公開したインスタレーションでした。初日二日目を通した演者からの感想を北川原さんの文章でお楽しみください。



奈佐健臣さん(左)と篠田浩美さん



着替えるという日常的な「動作」は、けれどそれを「動機」として捕らえた瞬間、非日常へのあこがれを垣間見せます。この服からあの服へ、その境界線上にのみ非日常が存在する、その感覚はとても演劇的です。

その「きがえる」事を主題とした建築インスタレーションの場に対し、演劇の視点から、二日に渡り二種類のアプローチをこころみました。

一日目——空間“に”きがえる

鋳物工場の建物をそのまま活かしている会場の特性から「錆びる」というキーワードを選び、即興詩を交えた詩の朗読とコントラバスのジャムセッションを披露。場の基軸となる軸組の組み上げ作業のかたわらで、刻々と変化する空間にみずからが影響を受けることを意識して作品の骨格を練り、その肉付けは、場の完成に伴い、即興性を重視したライブパフォーマンスとしておこないました。

二日目——空間“を”きがえる

芥川龍之介『羅生門』『蜘蛛の糸』をマリンバ・パーカッションの生演奏とともに上演。

前日に完成した空間を、軸組だけを残し一度裸にし、照明・音・物語・演者といった要素によって再構築。空間そのものを着替えさせることにより、軸組の持つ意味合いまでも変化することを提示しました。

人間が、空間が、「きがえる」。その一瞬で顕れる非日常を体感していただけたのではないかと思います。 北川原梓

10月12日は「衣と体のせめぎあい」のお披露目パフォーマンス。錆びた鉄骨が見える工場の中、衣装をすべてはぎとられて木軸の裸体があらわにされた空間で、赤尾木織音さん、山田好恵さん、江間篤子さん、藤田知穂さん、福田麻衣さんが制作した衣装を着て、海保文江さん、桜井陽さん、蒼浩人さんが、ところせましと踊りつづけた不思議な一時間、その熱気の片鱗が写真から伝わるいいのですが。



10月18日、走った後で考える「アート井戸端かいぎ」を川口市芝公民館で開催しました。会場のご近所にかつてあった紫烟荘は1926年に建てられ、その数年後には焼失してしまった堀口捨巳の名作です。修復建築家の津村泰範さんが地域とのかかわりをふまえて紹介した午前の部から昼休みをはさみ、井戸端かいぎが始まります。走った後で考える種は、ニコラス・ジョン・ハブラーケンの建築思想を下敷きにしています。彼が展開したオープンビルディングの思想は「時」「レベル」「関与」を基本に置き、インフィル、スケルトン、アーバンティッシュなどのヒエラルキーで住まいに関与してゆくことで、時とともに変化する居住環境に対応しようとした方法論です。このように書くともずかしげな理屈ですが、ハブラーケンに建築を学んだ芝浦工業大学教授の南一誠さんがかみくだいて話してくださったプレゼンテーションをかかわりに、造船技術を建築に応用された高橋和志さんがご自身の仕事を「洋装のような建築」として紹介し、本業は呉服屋の中村元さんが「和装と洋装」の違いを解き明かしてくださったシンポジウム、話題を和洋の比較にまで広げたのは、オープンビルディングの思想が、かつての日本建築の中で実現されていたことをハブラーケン氏が著書の中で指摘されていたからです。



ニコラス・ジョン・ハブラーケン



南一誠さん



高橋和志さん

最後に、これらの催しを黒子役に徹し引っ張ってくださった川口市の小川順一郎さんに、この誌面を借りて感謝の意を表し、この報告を結びます。 三浦清史(SMF代表・運営委員)